

序 文

全世界が COVID-19 の猛威にさらされる 2020 年の初秋に、消化管がん検診の増刊号のゲストエディターのお話をいただいた。伝統ある「臨牀消化器内科」の編集委員の先生方からご推挙いただき、日頃、本誌の愛読者でもある私は光栄に感じる一方で、一抹の逡巡が過ぎったのも事実であった。未知のウイルスによるパンデミックが世界を覆い、多くの医師が感染症対策に奔走するなかで、予防医学や検診を語ることが難しい雰囲気が垂れ込めているのを肌で感じる日々だったからである。医学界が臨床の比重を高めざるをえないこの時期に、がん検診関連の原稿を引き受けていただける先生方がどれだけいるだろうか、思い悩む心境であった。冷静に考えれば、悪性腫瘍は COVID-19 とは別に対応すべき重大疾患であることに変わりはなく、消化管がん検診を疎かにするべきではないのはもちろんであり、こんなときだからこそ考えて、引き受けさせていただいた。2021 年に入っても、COVID-19 の第 3 波・第 4 波が相次いで本邦を覆う厳しい状況が続いているが、そんななかで本増刊号の企画に賛同いただき、ご執筆を快諾していただいた諸先生方には、深く感謝申し上げるばかりである。

本特集号では、冒頭に「検診・スクリーニングを理解するためのプロローグ」という章を設けることにした。消化管疾患を専攻する医師は、内視鏡や腹部超音波によるスクリーニング検査を中心に、初期・後期研修の頃からがん検診に携わることが少なくないため、こうした分野に自然と慣れ親しむことが多い一方で、スクリーニングの設定やがん検診のエビデンス構築の難しさ、検診における harm の理解と精度管理の重要性、検診・健診を支える社会的な仕組みなどを体系的に学ぶ機会はほとんどないのが実際である。予防医学や検診・健診への理解が不十分なまま、消化管がん検診に携わることには大きなリスクとデメリットがあり、本書がこうした点の改善に少しでも繋がれば幸いである。次いで、「消化管がんの疫学」「胃がん・大腸がんの検診・スクリーニング」「知っておくべき前癌状態と腫瘍性疾患」、さらに「この分野のトピックス」について、各分野のエキスパートの先生方に概説いただいた。諸疾患の疫学的動向、検診・スクリーニングの現状と展望は、がん検診に携わる者は常に把握しておくべきであるが、忙しい日々のなか、古い知識のままで検診に携わっている医師が少なくないのが実情である。多くの先生方にご活用いただき、がん検診の知識のブラッシュアップに少しでもお役に立てば幸いである。

「コロナ禍」がいよいよ厳しいなか，お力添えをいただいた諸先生方に重ね重ね御礼を申し上げますとともに，消化管がん検診に携わるすべての方々のご健勝，ならびに，お役に立てるよう腐心した本書を一人でも多くの先生方に活用いただくことを，願うばかりである。

2021 年 6 月

東京大学医学部附属病院予防医学センター／消化器内科

山道 信毅